
僕と優菜の物語 第1話

sonick

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と優菜の物語 第1話

【Nコード】

N3059G

【作者名】

sonick

【あらすじ】

飛行機事故で両親を亡くした主人公相澤純が医師となるために恋人金澤優菜とその両親、そして大学生活の中で1人の人間として成長していく話です。

第1話

高校の卒業式も無事に終わり、
僕はクラスで行うという

【打ち上げ】に出席することなく、
その日の夕方

四月から始まる大学生活を送るために
新幹線で、長年住み慣れたこの町を離れた。

僕の荷物は

着替えの入ったバックが一つだけ、、

着替えとたったって

高校の制服から

ラフなジーンズとシャツとセーターに着替えただけ、、

そのほかの荷物は

大学の寮に送ってしまうか

処分してしまった、、

16:12発の新幹線に乗るために、

僕は一人

新幹線ホームで

列車が来るのを待っていた。

いくら風がなくて暖かいといってもそれは日中のこと、、、

夕方この時間になるとさすがに風が強くなってきた。

僕はコートの襟を立てて少しでも風が入らない様にした。

夕日がホームに僕の長い影を落とす、、、
いくら

【明日からの生活の楽しい部分】
だけを考えようとしても、
どうしても、

【過去の楽しかった日々】
が思い出される、、、

もう泣くまいと思っているのに、、、

僕の意味とは関係なく涙が頬を伝う、、、

夕方この時間帯に

乗客が少ないといたって

身長が180cmを越す男子高校生が
泣いているのを見られたら、

さすがに恥ずかしい、、、

でも、

いくら解っていてもこればかりは、

その時、

風に乗って

僕の名前を呼ぶ声が

聞こえたような気がした、

こんなところで？

僕は空耳だと思って

気に掛けないでいた。

『・・・い澤・・・ん、

相澤・・・ク・・・、

相澤純君！！』

『！？』

今度は、

はっきりと

僕の名前を呼ぶ声が聞こえた。

僕は慌てて周りを見渡した。

そこには、

昼間の卒業式の中に

僕の【第二ボタンと名札が欲しい】
と喋ってきた

隣のクラスの女の子、
金澤優菜の姿があった。

『よかった、、間に合った、、
泉君ったら

なかなか教えてくれないんだもの、、
相澤君の乗る

新幹線の出発の時間、、】

駅についてから、ここまで、
きつと走り続けたんだろう、、

彼女は息を切らせながら、
俊に対しての不平不満を言い続けていた。

『どうしてニムロっ？』

僕にはそう聞く事しか出来なかった。

『あのね、、、』

相澤君、、、

これから独りきりの生活に
なってしまうから、、、

もちろんご両親が亡くなってから

今までひとりで生活してきたってことは
知っているけど、、、

でも、

これからは

本当に誰も知っている人がいないところで
ひとりで生活しなくちゃいけないんでしょ？』

『うん、、、でも、親戚もいるし、、、』

『そうなんだ、、、少し安心できたわ。

あのね、、、

制服の第二ボタンと名札のお礼に、、、

これを、、、

相澤君に渡したくて、、、』

そういつて、

優菜は雑誌ほどの大きさの袋を差し出した。

『これは？』

『ねえ、、、開けてみて、、、』

優菜は僕の顔を微笑みながら見つめて、
自分が渡したものを見た瞬間の
僕の反応を待っているようだった。

僕は優菜から渡された袋を開けて
中の中のものを取り出した。

『これ、、、』

『気に入ってもらえた？』

『気に入るも何も、、、君が作ったの？』

『フッフ 以外でしょ？
でも、私こういうの本当は得意なのよ』

彼女が胸を張って言い切るほど
それは
到底素人が作った物とは思えないほどの
立派なものに仕上がっていた。

『卒業式の後、
相澤君たちのクラスで
写真を撮っているのを見て
思いついたの、、、
慌てて撮ったからどうかと思ったけど、、、
でも、綺麗に出来てるでしょ？』

俊の提案で撮った高校最後のクラス写真、、、
僕と俊を中心として
クラス全員が写っている、、、
そして、、、

クラスの皆から僕へのメッセージが、
一人も欠けることなく書かれていた。

『どうやってこれを？クラスだって違うのに、、、、』

『泉君に頼んだの、、、、』

相澤君に、、、、

今日渡したいからって、、、、』

僕は優菜の

【相澤君に憧れていました、、、、
今でも憧れています、、、、】

といった言葉を思い出した。

でも、

それだけで、

ここまでのことが出来るのだろうか、、、、

『ありがとう、、、、大変だったんじゃない？』

『何もしないで後悔したくなかったから、、、それに、、、辛いときや悲しいときにこれを見て、相澤君にはいつでも皆がついているんだって思ってもらいたいから』

ああ、この子は僕と同じ様に、何もしないうちから諦めることをしたくない子なんだなと思った。

『でも、俊が、新幹線の時間をなかなか教えなかったって？』

『どうして私が相澤君の為にそこまでするのか、、、その理由を教えろって、、、教えなければ新幹線の時間も教えないうって、、、そうしたら、』

女の子達が

私の気持ちを察してくれて、、、

泉君から聞き出してくれたの、、、

それと、

寄せ書きのことも

彼女達が中心になつて

動いてくれたお陰で

クラス全員のメッセージが

もらえたの、、、

相澤君のクラスって

皆いい人ばかりよね』

柔らかい、

僕の心を優しく包んでしまう笑顔を

僕に向けながら

優菜は経緯を話してくれた。

僕は、

優菜のその笑顔を見た瞬間、

優菜がとても愛しく思えた。

『ありがとう、、、』

僕は優菜のことを
抱きしめていた、

『相澤、君、』

優菜は突然のことに
どうしていいかわからないようだった。

『金澤さん、、、悪い、、、
しばらく、、、このままで、、、
いて、、、』

僕は

【初めて異性を好きになる】
という気持ちと、

【僕のためにここまでしてくれる人がいる】
ということへの感謝の気持ちで、
また、涙が頬を伝っていた。

優菜は

そんな僕の気持ちがあったのか、

まるで母親が子供をあやすかのように、
僕の背中を優しく叩いてくれた。

駅の構内アナウンスが
新幹線の到着することを告げた。

僕は気持ちを抑え

『ありがとう、、、
大事にするよ、、、
それと、
僕から金澤さんをお願いをしても
いいかな、、、』

『私で出来ることなら、、、』

優菜は

『何かしら？』

というような表情で僕を見つめた。

『遠距離になってしまっけど、僕と付き合ってもらえないか？』

もちろん、

迷惑じゃなければけど、、『』

優菜は、

一瞬何を言われたのかわからなかった様だった。

『えっ、、、それって、、、ほんとに、、、私でいいの、、、本当に？』

『うん、、、君じゃなければダメなんだ、、、僕にとっては、、、』

優菜の瞳に涙が溢れる、、、

『だめ？』

『ダメなんかじゃない、、、私、、、嬉しくて、、、遠距離なんか関係ない、、、私だって、、、相澤君じゃなきゃ、、、ダメだから、、、ありがとう』

僕は急いで
携帯の番号とメールアドレスを書いて
優菜に渡した。

『これ、僕の携帯とメールアドレス。
電話でもメールでもどっちでもいい。
金澤さんの、
優菜の都合のいいほうでいいから！』

新幹線がホームに入ってきた。

『優菜、いろいろとありがとう、、、
落ち着いたらちゃんと連絡するよ』

『うん、相澤君も元気でね。
後で、メールするから』

僕は優菜の額に

『チュッ！』

とキスをすると

新幹線に乗り込んだ。

『待ってるよ、、、じゃあ、行って来るね！』

『うん、、気をつけて、、行ってらっしゃい！』

優菜が言い終わった瞬間
新幹線のドアが閉まった。

僕は出来る限り、

優菜に対して笑顔を見せた、、

僕が泣き顔を見せれば、

優菜が心配をするから、、

僕は自分の心の中の変化に
少なからず驚いていた、、

優菜を愛しいと思い、

優菜と付き合うことを決めて、
今、

その好きな人に心配をかけないようにと
自分の感情を抑えようとする力が
働いていることに、、

優菜も一生懸命

泣かないようにとしているのが解った、、

でも、

流れる涙を抑えることは難しく、
ハンカチで何度も涙を拭いていた。

動き出した新幹線のガラス越しに、

僕は

【優菜、大好きだよ！】

と、

聞こえるはずもないのに言っていた。

その瞬間、

優菜の顔が笑顔でいっぱいになった。

僕は、

優菜の笑顔を最後に見れたことが嬉しかった。

新幹線は次第にスピードを上げて行き、

僕は優菜と

僕の生まれ育ったこの町に

別れを告げた。

大学での新しい生活は

自分で考えていた以上に

ハードで厳しいものだった。

奨学金を受けているといつても
講義で使用する書籍代や

生活費を考えると
バイトをしないということとは厳しかった。

両親の航空機事故による賠償金があったけど、
それに頼ってばかり
というわけにもいかないから、、、
僕はコンビニでのバイトを決めて
バイトをしながらの学生生活を送った。

1年2年ぐらいまではどうにかやっていたけど、
さすがに専門課程が主になってくる3年になると、
時々挫けそうになる自分がいた。

でも、

そういうときに限って
恋人の優菜から
メールや電話が携帯に入ってきた。

それはまるで、
いつも僕の生活を見ているかのように、
僕の辛い状況や
気持ちを察したものばかりだった。

僕は優菜からのメールと電話に
いつも元気付けられ、

またがんばろうという気持ちに
なることが出来た。

1・2年のときは

僕も大学生活に慣れる事が主で、

優菜に会いに戻るということが出来なかった。

もちろん優菜が僕に会いにくるなんてことは、

彼女の両親が許してくれるはずがなかったから、

僕達はメールと電話のやり取りしか出来なかった。

けど、

3年になった今年は

状況が少し変わった。

僕も優菜も20歳を過ぎたということ

彼女の両親が、

優菜が僕のところ

に会いに行くことを
許可してくれた。

7月のある日、

【今年は夏休みは取れますか？
両親があなたに会いに行くことを
許可してくれたの。
あなたの夏休みに合わせて
会いに行きたいの、、、
ダメ？、、、

優菜】

と彼女からのメールが
僕の携帯に入った。

僕は2年ぶりに優菜に会える嬉しさから、
すぐにバイトのシフトと
ゼミの日程を調整して
返信のメールを送った。

【8月の第1週なら大丈夫だよ。
バイトもゼミの方も全て調整したから！
新幹線の時間がわかったら連絡して！
駅まで迎えに行くから

純】

【8月2日3日4日に行くけど、、、
もちろんホテルに泊まるから
心配しないで
あなたに会えるのを

楽しみにしています。

優菜】

優菜が僕に会いに来るといふ8月の2日3日は僕の通う大学のある市の隣の市で毎年花火大会が開かれる日だった。

そのことを

僕は以前優菜に話したことがあって、一度優菜と一緒に見てみたいと言ったものだった。

優菜が僕に逢いに来た日、僕は叔母の車を借りて優菜を駅まで迎えに行った。

2年半ぶりの再会、、、

僕は優菜を人ごみのなかで見つけられるか心配だった。

改札口のほうを見ていると前方から

あの日僕に見せてくれたのと

同じ笑顔をした優菜が
僕のほうに向かって
歩いてくるのが分かった。

『相澤君!』

『優菜!』

僕達はお互いの姿を見つけると、
どちらからともなく
お互いの名前を呼んでいた。

『相澤君、、、
なんだか2年前よりも
素敵になつたみたい、、、
同じ大学の女の子から、
声をかけられるんじゃない?
付き合ってくださいって、、、』

『優菜、、、

僕には優菜だけだよ。
優菜がいるから

今日まで頑張ってこれたんだから。
そんな心配は要らないよ。

優菜こそ、、、

その、、、綺麗になつて、、、

女の子って不思議だよね、、、

たった2年でこんなに

変わってしまったんだから、、、

僕のほうこそ、

優菜が誰か他の人に

取られてしまふんじゃないかって、、、

ものすごく不安だよ』

『ふふ、、、お世辞でも嬉しいわ』

『お世辞でもなんでもないよ！

僕の本心から、、、そう思うよ、、、

ごめん優菜、、、

いつも傍にいてあげられなくて、、、』

『相澤君、、、そんなこと言わないで、、、

傍にいられなくても、

相澤君は

いつも私の傍にいてくれるって、、、

思えるんだから』

『本当に?』

『ええ』

僕は優菜の言葉に
表情に、
思わず抱きしめたくなくなってしまった。

『優菜、疲れてない？
どうする、』

花火が始まるまで、
まだまだ時間があるし、、、
そつだ、僕の大学に行ってみる？』

『いいの？行って見たい！
相澤君が、
いつも勉強しているところ』

『もちろん、
じゃあ昼でも食べながら
行ってみよう』

僕は優菜を連れて
医学部のキャンパスに向かった。

キャンパスには夏休みといっても、
ゼミや研究室での作業のある学生達が
まだ残っていた。

『オイ、相澤、

お前今日休みじゃなかったのか？』

『ちょっと用事があったね。

悪い、

後でレポート見せてくれよ』

『用事って、、、

隣りにいる素敵な女性のことか？

お前の彼女？

なるほどね、、

ゼミの女達が噂をしているわけだ。』

『オイ、

彼女の前で余計なことと言つなよな』

『わかってるよ。』

『じゃあ、5日の日にゼミで!』

『今の人は?』

『ああ、同じゼミのヤツだよ』

『ねえ、』

本当に

今日私が来ても大丈夫だったの?
ゼミがあつたんじゃないの?』

『優菜、、、』

僕はちゃんと調整をしたって言った筈だよ?

大丈夫!

それに僕には、

今はゼミよりも、、、

優菜のほうが大事だから』

『相澤君、、、』

『ねえ、優菜、、、』

僕のこと

【相澤君】

じゃなくて

【純】って呼んでくれないかな、、、
やっぱり、、、

恋人同士だったら

First nameで呼んで欲しい、、、
』

『じゅ、、、ん
』

『ハイ!』

優菜が照れくさそうに
僕の名前を呼んでくれる。

今までの僕達にはない
『初めて』
のこと、、、

今年の夏は
僕にとって、、、
そして優菜にとっても
いくつもの2人だけの『初めて』を
経験する夏になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3059g/>

僕と優菜の物語 第1話

2010年10月13日07時39分発行